

上級・超級学習者と母語話者の間に残る違い ：中国語母語話者の日本語L2習得

範, 雯婷 / FAN, Wenting

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

129

(発行年 / Year)

2025-03-24

(学位授与番号 / Degree Number)

32675甲第625号

(学位授与年月日 / Date of Granted)

2025-03-24

(学位名 / Degree Name)

博士(学術)

(学位授与機関 / Degree Grantor)

法政大学 (Hosei University)

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00031355>

博士学位論文
論文内容の要旨および審査結果の要旨

氏名	範 雯婷
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	第 889 号
学位授与の日付	2025 年 3 月 24 日
学位授与の要件	本学学位規則第 5 条第 1 項(1)該当者(甲)
論文審査委員	主査 教授 川崎 貴子 副査 教授 椎名 美智 副査（学外）北海学園大学教授 浦野 研

上級・超級学習者と母語話者の間に残る違い
：中国語母語話者の日本語 L2 習得

1. はじめに

範 雯 婷 氏 提 出 学 位 請 求 論 文 「 上 級 ・ 超 級 学 習 者 と 母 語 話 者 の 間 に 残 る 違 い ： 中 国 語 母 語 話 者 の 日 本 語 L2 習 得 」 は ， 氏 が 法 政 大 学 人 文 科 学 研 究 科 国 際 日 本 学 イ ン ス テ ィ テ ュ ー ト 在 学 中 に 執 筆 し ， 査 読 付 き 論 文 と し て 「 国 際 日 本 学 論 叢 」 に 発 表 し た 1 本 の 論 文 ， お よ び 査 読 付 き 学 会 で あ る 日 本 認 知 科 学 会 に 発 表 し ， そ の 学 会 論 文 集 に 掲 載 さ れ た 2 本 の 論 文 が 多 く を 占 め て い る 。 こ れ ら の 論 文 を 学 位 請 求 論 文 の 目 的 に ふ さ わ し く 全 体 と し て の 統 一 性 を 構 築 し ， 論 述 の 一 貫 性 を 確 保 す る た め に 加 筆 修 正 し た の が 本 博 士 学 位 請 求 論 文 で あ る 。

2. 論文の構成

第1章 序論

- 1.1 研究の背景と目的
- 1.2 論文の構成

第2章 臨界期仮説、母語話者と上級・超級学習者の違い

- 2.1 臨界期仮説と大人の L2 言語習得
- 2.2 母語話者と上級・超級学習者の違い

第3章 類似表現に関する研究

- 3.1 名詞化表現「こと」と「の」
- 3.2 丁寧体の述語否定形表現「ないです」と「ません」
- 3.3 理由を提示する表現「から」と「ので」
- 3.4 まとめ

第4章 長音の母音長の変化

- 4.1 日本語 L2 学習者による長音発話：小熊（2001）
- 4.2 長音の短音化現象
- 4.3 範（2021）による L2 学習者の長音発話の分析
- 4.4 まとめ

第5章 アクセントのデフォルトパターン

- 5.1 日本語のアクセントパターン
- 5.3 まとめ

第6章 総合的な考察

- 6.1 各章のまとめと考察
- 6.2 結論
- 6.3 今後の展望

3. 本論文の概略と目的

本論文は、中国語を母語とする日本語学習者に焦点を当て、上級・超級レベルの第二言語学習者と母語話者の言語使用、および内在化された文法の違いを多角的に分析した研究である。これまでの研究では学習者の誤用に注目し、研究が行われてきた。本研究では、誤りとしては現れない選択傾向、微細な音響的特徴、そして内在化された文法など、表面的には明らかにならない違いに着目し、母語話者と上級・超級学習者との違いを明らかにすることを目的としている。

4. 各章の概要と評価

・ 1章・2章の概要

第1章では本論文の背景、目的、および構成を説明している。

第2章では、臨界期と第二言語習得に関わる問題を取り上げている。大人の第二言語習得では母語話者と同じレベル（Ultimate Attainment）に到達することが困難であるとされているが、一方で適切な環境があれば可能であるとする主張もある。本章では、両方の先行研究を具体的な研究事例を引用しつつ説明している。

第二言語学習者と母語話者との間には、学習レベルが上がってもなお、残る違いがあるとの指摘が多くなされている。これらの違いは単なる誤用にとどまらず、表現の選択などにも表れるという。本章では、このような研究背景を説明した上で、本研究の目的を述べている。具体的には、誤用としては現れない選択傾向（プリファレンス）、微細な音響的特徴、そして内在化された文法という、エラーとしては表出しない違いに着目し、第二言語学習者の文法と母語話者の文法との違いを明らかにすることを目的とすることである。

・ 1章・2章の評価

1章、2章では研究の背景が簡潔に述べられ、本研究と先行研究との関連性が明確に示されている。取り上げられている先行研究は、英語（水野，2000；Snape，2008）、フランス語（Coppieteers，1987）、イタリア語（Sorace，2003）、ドイツ語（粕谷・荒井，2015）など、本研究で対象とする日本語以外の言語を扱ったものが選ばれている。本研究は日本語の第二言語習得を扱うものの、第二言語習得研究として俯瞰的な立場から学習者と母語話者の文法の違いを論じるという視点で書かれている。しかしながら、本章における臨界期に関する研究、特に臨界期以降でも母語話者レベルの獲得が可能であるとする研究についての記述が不十分である。これらの点についてより具体的かつ詳細なレビューが必要であると考えられる。

・ 3章の概要

第3章では、名詞化表現「こと」と「の」、丁寧体の述語否定形表現「ないです」と「ません」、理由を提示する表現「から」と「ので」という3つの類似表現のペアについて、中国語を母語とする上級・超級日本語学習者と日本語母語話者の使用傾向を比較分析している。

名詞化表現の分析からは、中国語母語話者が上級・超級レベルであっても、「こと」・「の」での誤用が残存することが明らかになった。また、両表現が許容される場合、中国語母語話者は「こと」を選択する傾向が見られた。特に前接動詞句が「する」で終わる場合、日本語母語話者が両者を許容するのに対し、中国語母語話者は「こと」を選好する傾向を示した。

丁寧体の述語否定形表現については、日本語母語話者が明確な選好を示さないのに対し、中国語母語話者は「ないです」を選好する傾向が見られた。また、社会的関係性による影響も見られ、目上の相手に対して、日本語母語話者は「ません」を選択する傾向がある一方、中国語母語話者にはそのような傾向が見られなかった。

理由を提示する表現においては、日本語母語話者が「ので」への選好を示したのに対し、中国語母語話者は「から」をより多く選択する傾向が見られた。会話相手との関係性による影響も認められ、目上の相手に対しては両者とも「ので」を選好したが、その程度は中国語母語話者の方が弱かった。

これらの分析結果から、中国語を母語とする上級・超級日本語学習者は、母語話者とは異なる表現の選択傾向を持っており、それらは誤用としては表面化しない違いとして残ることが報告されている。

・ 3章の評価

本章では従来の誤用分析とは異なり、学習者の言語使用を単なる正誤の観点からではなく、プリファレンスという観点からも分析することにより、上級・超級学習者に残る

母語話者との微細な違いを明らかにしている点で評価できる。さらに前接動詞の、および社会的関係性による分析を追加したことで研究が深まっている。

・ 4章の概要

第4章では、日本語母語話者に見られる「長音の短音化」現象に着目し、中国語を母語とする上級・超級日本語学習者の音声的特徴を分析している。日本語母語話者と中国語を母語とする上級・超級学習者の発話を以下の3点から比較分析した：(1)長音の長さ、(2)話速による母音長の調整、(3)語中位置による長さの変化。

音響分析の結果、中国語母語話者の発話は長音の長さや、話速による長さの調節については母語話者と差が認められなかった。しかし、日本語母語話者が語中の位置により長音の長さを変化させるのに対し、中国語母語話者の発話にはそのような変化が見られなかった。この研究は、上級・超級レベルの学習者であっても母語話者との間に微細な音声的な差異が残存することを示した。

・ 4章の評価

4章では、これまでの誤用分析ではあまり着目されてこなかった音声変化の側面を取り上げた点にある。特に、コミュニケーション上の問題とはならない微細な音響的差異に着目したことは、新たな視点であろう。ただ、分析対象としたコーパスでの対象発話は規模も発話場面も限られているため、より規模を拡大して調査を行う余地はあったのではないか。

・ 5章の概要

第5章の「アクセントのデフォルトパターン」においては、通常の言語使用では表面化しない違いとして、アクセントのデフォルトパターンに注目し分析を行った研究である。範ら(2020)ではまず、窪菌(2006)の指摘する新語のデフォルトアクセントについてした後、日本語母語話者と中国語を母語とする上級・超級学習者を対象に、3モーラ・4モーラの無意味語の発話実験を実施した。無意味語は撥音・拗音を含まない語、拗音を含む語、撥音を含む語の3種類を設定し、それぞれのアクセントパターンを分析した。

分析の結果、日本語母語話者は3モーラ語では窪菌によるアクセント規則に従った頭高型アクセントを、4モーラ語では撥音位置が3モーラ目の撥音語を除き平板型を使用することが明らかになった。一方、中国語母語話者は3モーラ、4モーラ語のすべてのタイプで平板型を使用する傾向になることが明らかになった。また、中国語母語話者の発話には、尾高型の使用も見られた。これは日本語母語話者の発話には見られないものである。

この結果から、中国語母語話者の文法においてもアクセントのデフォルトパターンは形成されているものの、それは日本語母語話者のものとは異なることが明らかになった。特に、中国語母語話者に見られる平板型の過剰使用は、日本語の3モーラ名詞に平板型が多いことによる規則の過剰一般化の可能性が示唆された。

・ 5章の評価

中国語母語話者に見られる平板型の過剰使用は、日本語の3モーラ名詞に平板型が多いことによる規則の過剰一般化の可能性が示唆された。これらの発見は、上級・超絶レベルの学習者が持つ内在化された文法の特徴を示すとともに、第二言語習得における音韻規則の習得過程についての重要な示唆を提供している。

第5章の「アクセントのデフォルトパターン」においては、アクセントのデフォルトパターンを取り上げ、発話実験によりL2学習者と母語話者の内在化された文法の違いを比較した。日本語母語話者は3モーラ語では外来語アクセント規則に従った頭高型アクセントを、4モーラ語では撥音位置が3モーラ目の撥音語を中高型アクセント以外、平板型を使用した。一方、中国語母語話者は3モーラ、4モーラ語の全ての語タイプで平板型を広く使用した。以上のアクセントのデフォルトパターンの比較を通じて、中国語を母語とする上級・超絶学習者の文法においてアクセントのデフォルトパターンは形成されていたことが分かった。そして、中国語を母語とする日本語L2学習者の場合、上級・超絶レベルになっても、母語話者とは異なるアクセントのデフォルトパターンが形成されており、日本語母語話者の間には誤用としては表れない違いが残っているという結論が得られた。

・6章の概要

第6章の「総合的な考察」においては、3章から5章の研究を総括し、以下の3点を結論としている。

- 類似表現における選択傾向について、L2学習者と日本語母語話者の間には明確な違いが存在する
- 上級・超絶レベルのL2学習者でも、ポジションによる長音の短音化では日本語母語話者との違いが観察される
- L2学習者は、日本語母語話者とは異なるアクセントのデフォルトパターンを形成している

特に重要な点は、これらの差異が通常の言語使用では誤用として表面化しないという点である。このような「隠れた」違いは、高度な言語能力を獲得した学習者においても、完全には消失しないことが示唆された。また、今後の課題として、その他の言語項目での検証、他のターゲット言語の場合の検証。さらにこれらの表出しない違いが、習得が進むとどう変化するかなど、さらなる発展的研究の可能性を挙げている。

・6章の評価

6章では論文の内容、および明らかになった点がまとめられている。また、今後の展望として、本研究を今後どのように発展させる可能性があるのかが論じられている。特に誤用としては観察されない違いが、学習の習得が進むことによりどのように変化するかは本論文を更に発展させ、意味あるものにするためには本論文では指摘されていないが、特に第二言語習得において重要であると思われる。誤用として表出しないのであれば、修正・訂正されることも無い。もし習得が進むにつれてなんらかの変化が見られるのであれば、この変化kはどのようにもたらされるのであろうか。

5. 本研究の総合評価

誤用としては表れない違いに焦点をあて、同義語の選択傾向に加え、必ずしも起こるわけではない短音化などの音声ルールや表出しないデフォルトアクセントを比較したことはオリジナリティがある視点であり、第二言語習得研究において意義深い研究である。

しかし、これらの類義語の選択の違いや微細な短音化の違いはエラーとしては受け取られないものの、母語話者には音響的な不自然さ、つまり外国語訛りとして受け取られるのかどうかについて調べるなど、更に踏み込んだ調査を行う余地があったのではないかと考える。

論文を通して、第二言語習得研究において従来あまり注目されてこなかった点に着目している点は評価に値するが、考察が十分に深いとは言えない点もあり、これらの研究を更に1つの「表出しない差異」はすでに観察・報告されているエラーとどのように繋がるのかという視点でも考察があれば、先行研究と本研究との繋がりが明確になるのではないかと思われる。

しかし、誤用としては表面化しない違いを多面的に実証的に示した点は、高く評価できる。いくつかの課題は残るものの、第二言語習得研究に対する学術的貢献は大きく、今後の研究の発展にも示唆を与える優れた研究であると判断できる。

提出された申請論文に含まれる誤字・脱字・表現不統一は見られるものの、許容範囲であると判断する。学位論文公開に向け、適宜修正を求める。

6. 最終試験の成績

本学学位規則により、最終試験として2024年11月27日に公開の場で口頭試問を行った。範雯婷氏からは論文内容に関して適切な説明が行われ、審査小委員会委員および出席者の質問に対しても的確な回答がなされた。その結果、審査小委員会は最終試験の結果を合格と判断した。

7. 結論

以上により審査小委員会は、範雯婷氏提出学位請求論文「上級・超級学習者と母語話者の間に残る違い：中国語母語話者の日本語L2習得」を博士論文審査基準に照らし合わせて、基準以上の業績であると評価し、範雯婷氏を博士（学術）の学位を授与される資格を有するものであるとの結論に達した。

以上